

トリスタン

口笛を吹く

語り切れない、焦燥と諦念の混濁した愉快さ
だから口笛を吹く

(今なら命を終えても悪くあるまい)

生そのものが大気に、たらたらと流れ出し
目の前の風景が揺らぎ始めている
——眠りが襲う

奇怪に組み立てられた緩やかな死相
端正で、かつ浮き立つような舞踏
そのふたつが、するすると巻き取られてゆく

(ああ、歓喜の涙が止まらない)

思わず微笑する空の高さ
誇らしげに春の日差しを受けた遠くの山並み
身を切るような冷たい風にも既に鋭さはない

弓なりに^{しな}撓う旋律
道端に顔をのぞかせた黄色い花々の先に
透明な階段が消え入るように続き、導いている

絶望の中央に結実し、熱しきった真っ赤な実
その周囲を未練がましく歩き回る夢

遠くから整然と近づいてくる軍勢
あらゆる温もりを怖れに変える者ども

苦役を終えるという意識はない
ただあるのは、安堵、という快樂のみ

(おお、イゾルデ・・・)

(2010.4.3)